

研究者総覧：堀江 薫 (HORIE, Kaoru)

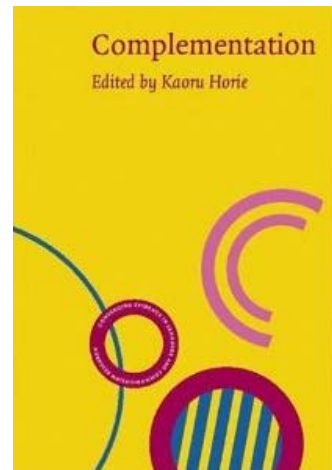
氏名	堀江 薫 (HORIE, Kaoru)	
職名	教授	
所属講座	日本語文化専攻応用言語学講座	
学位（専攻分野）	Ph.D.(Linguistics)・南カリフォルニア大学	
メールアドレス	horie@lang.nagoya-u.ac.jp	
個人のホームページ	http://horie.lang.nagoya-u.ac.jp/	
研究分野	言語類型論・対照言語学（特に日韓対照言語学）・認知類型論 （応用）認知言語学・機能主義的言語学 語用論・歴史言語学（特に文法化研究）・言語接触	
現在の研究テーマ	複文（名詞修飾節・補文・副詞節）の認知類型論的対照研究, 第二言語としての日本語習得過程の応用認知類型論的研究	
所属学会	日本語科学会（運営委員・編集委員長・Managing Editor） 日本認知言語学会（理事・学会誌 Editor） 日本語学会（評議員）	
主要著書・論文	2012. The Interactional Origin of Nominal Predicate Structure in Japanese: A Comparative and Historical Pragmatic Perspective. <i>Journal of Pragmatics</i> 44, 663-679. 2009 『言語のタイポロジー——認知類型論のアプローチ』 研究社（「認知言語学のフロンティアシリーズ」5巻）（共著） 2005. 「日本語と韓国語の文法化の対照」『日本語の研究』1巻3号, 93-106. 2000a. <i>Complementation: Cognitive and Functional Perspectives</i> . John Benjamins. (Converging Evidence in Language and Communication Research Series 1). (編著) 2000b. Core-oblique Distinction and Nominalizer Choice in Japanese and Korean. <i>Studies in Language</i> 24.1, 77-102.	

<p>自己紹介文</p>	<p>私は 1994 年から東北大学大学院において 16 年間にわたって日本語を中心とする言語類型論、認知言語学、対照言語学、語用論分野の研究教育を行い、多くの修士論文・博士論文を指導してきました。また 2002 年から 2006 年にかけては東北大学 21 世紀 COE プログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」リーダーとして言語学、特に言語類型論と脳科学の融合的研究・教育を推進しました。この間、研究面では言語類型論・対照言語学（特に日韓対照言語学）、認知言語学を中心に研究活動を行い、最近「認知類型論」という学問分野を提唱しました。この間 2000 年に <i>Complementation: Cognitive and Functional Perspectives</i> (編著)、2001 年に <i>Cognitive-Functional Linguistics in an East Asian Context</i> (共編著)、2004 年に『対照言語学の新展開』(共編著)、2009 年に『言語のタイポロジー - 認知類型論のアプローチ-』(共著)、『言語・脳・認知の科学と外国語習得』(共編著)、2010 年～12 年に <i>Studies in Linguistic Sciences</i> 9, 10, 11 (共編著)を出版しました。教育面では多くの博士課程修了者が大学や研究所などの研究教育職に就くキャリアパスの道筋をつけました。</p> <p>2010 年からは、本講座に移籍し、「応用言語学概論 a, b」を担当するかたわら、大学院生とともに言語類型論、認知言語学、認知類型論、そして日本語・外国語の応用言語学的研究を進めています。最近主指導教員として共に研究をしていく学生の方たち(博士後期課程学生、博士前期課程学生、研究生)も増え、研究・教育環境も充実してきています。</p>
<p>受験生へのメッセージ</p>	<p>以下(I)~(III)の研究分野に関連して修士課程・博士課程、あるいは論文博士の研究指導が可能です。(これ以外で対応可能な研究テーマもありますのでご相談ください)。博士課程においては、3 年程度で博士論文を完成できる能力・意欲がある方を求めています。関心のある方はまず電子メールでご連絡ください。</p>



『言語のタイポロジー』

また、研究生を希望される方は、受け入れ人数に制限がありますため、必ずしもご希望に添えない場合がありますがご了承ください。修士課程、博士課程のいずれにおいても日本語による論文作成能力はもとより、言語学分野の重要な文献が英文で書かれており、国際学会や国際的な学術誌への投稿が非常に重視されることから、日本語と英語の両方が堪能であることが理想的と考えます。



Complementation: Cognitive and Functional Perspectives (2000)

【指導可能な研究分野】

- (I) 日本語と他言語の言語類型論的・対照言語学的研究（日韓，日中語，日本語と他のアジア言語（北アジア，東アジア，東南アジア，南アジア，中央アジア），日英語，日本語と他のヨーロッパ言語，日本語とアフリカ言語との対比）
- (II) 日本語あるいは上記の言語を対象とする認知言語学・機能主義的言語学的研究，語用論，談話と文法(Discourse and Grammar)，歴史言語学・文法化研究・言語接触，社会言語学
- (III) 日本語教育，英語教育，他の外国語教育に関する応用（認知）言語学的・心理言語学的研究

これまでの簡単な研究歴については個人ホームページ

(<http://horie.lang.nagoya-u.ac.jp/>) と以下のリンクを参照ください。

http://www.gengosf.com/dir_x/modules/wordpress/index.php?p=158

最後に、修士課程と博士課程の研究の違いについて述べておきたいと思います。修士課程では、(i)先行研究の把握(literature review)がきちんとできること、(ii)論文の構成・論理展開・フォーマット(編集)が正確にできること、(iii)先行研究の知見を把握した上でオリジナルな分析・考察を幾分かでも提示できることが大切です。修士課程のうちに学会発表ができると理想的ですが、必須ではありません。博士課程では、上記の(i)~(iii)に加えて、(iv)研究の方法・分析・考察などにオリジナリティ(独創性)があり、研究分野に対して貢献ができること、(v)自分の研究を国内外の学会、学会誌に積極的に発表していく能力・意欲があること、が必要だと考えます。日本言語文化専攻では博士論文執筆資格を得るために2本の全国学会誌レベルの論文を出

	<p>版するという要件がありますので、(v)は非常に重要であると思 います。熱意と実力のある方の応募をお待ちしています。</p>
--	--